
東方想讓心

ニコウミ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東方想讓心

【Zコード】

Z6880Z

【作者名】

一ノ川ミ

【あらすじ】

多分、普通の一般人で有るう鷹島和樹、通称カズは高校生と言つ職業を終え「さあ、明日から自宅を護るぞ」と言つ立場におかれていた

そんなクズ野郎にあるお仕事の紹介がきた
「ある家に住むだけの簡単な御仕事です」

「うさんくせEEEEEEEEE」

そんな思いも笑い飛ばすかのように無理矢理契約してしまった和樹

のめのまえはまっくらになつた

胡散臭いババア系美少女（笑）に言われるがまま着いていった先は和樹にとって笑えない日常の始まりだった

突然修正を行う場合があります、そしてその修正で話が少し変わる可能性がございます、「了承ください」

プロローグ　修正済（前書き）

前書きと書い「こと」で

作者は東方 project は一応プレイはしております

ただ一年前です（・・・＝）

この作品に最強やチートなどは敵のみに存在します
主人公は人になら少し強いくらいです

どのくらい強いかと言われば犬より強くて熊より弱いです

分かりづらい？

じゃあ子供より強くてボフサップより弱いです

つまりそつ書い「こと」です

東方 project の作品を書くのは初めてですが小説自体は初めてではないです

ではお楽しみください

修正しました

プロローグ　修正済

「笑えよ、ベジータ…」

雪がパラパラと降り続く真冬の夜、ある青年が茶色の封筒を片手に公園のベンチに佇んでいた

「誰がベジータよ」

その青年の隣には同じくうらいの年の女性が寒そうに手を擦りながらジト目で青年を睨む

その女性は普通過ぎる青年とは真逆に周りより数倍もかけ離れた美貌、つまりはかなりの美人だ

綺麗な金髪にハーフ系の整った顔は幻想的な美しさを放っていた

「メリー、凄く驚くかも知れないんだが聞いてくれ…実は

「落ちたんですね、分かります」

「……笑えよ、ベジータ」

「下等民族が…とでも言つて欲しいの?現実を見なさいよ」

メリーと呼ばれた女性は青年が持っていた書類を奪つとパラパラめくり始めた

そして徐に溜め息をついた後すぐ隣にある「」箱に興味が無むをつに投げ捨てた

「ちょっと七つくらいボール探してくる、探さないで

そんなメリーを見た青年はウンザリしたように右手で顔を覆い息を吐きながら呟いた
そう、この青年はただいま就活中で色々な会社の入社試験を受け回つたが

「ええ……最初は簡単に受かるなんて思い込んだ俺が馬鹿だった……
30件も落ちるとさすがに希望が見えなくて命がマッハなんだけど……」

「この青年、ビートにも受からないのだ
しかも今日受けたこのクリスマスイブが記念すべき30件目なので
あるさ
まさにクルシミマスイブ

「ちなみにどんな会社受けたのよ?」

「刺身の上にタンポポを乗せる工場だ」

「……あれはタンポポじゃないわよ……」

「え?」

「て言つたそれ手作業じゃないわよ……」

「ええ……?」

もはやなにも言えなくなつた青年、和樹はそのまま横に倒れメリーの太ももに倒れる、所謂膝枕をいきなり断りもなくした和樹に対してメリーは溜め息をついた

「ちょっと…断りもなく女性にこんなことして……流石の貴方も落ち込んでるの？」

「ああ…『めん…ちょっとだけ人の温もりが欲しい…』

頃垂れるように和樹は咳く

メリーはそんな和樹を見てなにも言えず、殴ろうとして中に浮かせていた手を和樹の頭に優しく落とした
本来、和樹と言う男がこのよう人に素直に甘えるのは幼馴染みであるメリーが見ても始めてに近い行動だつた
そんな和樹に渴を入れるつもりだったメリーは言葉に詰まりながら頭を撫でた

「それで、どうするのかズ？」

「そっぱりだ……どうしようもない…」

「そう、まあ来年一月までに仕事が決まらなかつたら私が雇つてあげるわよ」

そうメリーは少し顔を赤くしながら言った、確かにお嬢様なメリーなら使用人として一人くらい雇えるかも知れないが、それは男として幼馴染みに雇われるとかなんか情けない思いが来てしまう

「いや……なんか男として情けないとかそんなレベルじゃなくて泣きそう…」

「プライドなんか犬にでも食わせなさい、そして私に膝まずいて忠誠を近いながら惨めに靴を舐めなさい、そしたら餌をあげるわ」

「お前に雇われた未来が想像出来るんだが、光が見えない」

「あら？私の使用人は明るい未来しかないわ」

そう言いながらメリーはクスクス笑つた

そんなメリーに苦笑いをしながら幾分か気持ちが落ち着いてきた、メリーはいつもこうなのだ

なんだかんだ言いながらしつかりと救つてくれる幼馴染み、神様が端正込めて作つた人のように出来た女性

「メリー」

顔を見るのは恥ずかしいのか和樹はそのままの体制で呟いた

「なに？」

耳が赤くなっている和樹に少し笑いながらメリーは優しく問い合わせた、そんなメリーの問いかけにこう言つ場面に慣れていない和樹はさらに恥ずかしくなつてくる

「そのだな……」

「なによ？」

言いたいことは簡単なのだ

和樹と言う男は何時になつてもメリーに助けられてばかりだと、それなのにろくに恩も返せない、なにもしてやれない、助けてやつた記憶もあまりない、頼りっぱなしでまだまだメリーに甘えてる自分が少し嫌になつて来て、それでも甘えてしまう自分がいて

「なに？和樹らしくないわ、はつきり言こなさこよ」

自分が言つことを分かつてる癖にニヤニヤ笑つ幼馴染みにこんな弱い男が言えるのはありきたりな言葉しかない

「こつもありがとつ……」

こんな事しか言えない馬鹿な男を気にかけてくれて、恥ずかしいからありがとうまでしか言えないけど

「あらあら、びびこたしまして」

クスクス笑う幼馴染みの声を聞いてると嬉しくなる自分がいるんだ、恋心ではないし、友愛でもない、なんなか分からぬけど、今はお礼だけ、そしていつかこの助けて貰っている恩を

「…必ず返すから」

メリーに聞こえないよつに和樹は呟く、聞こえてるのか聞こえてないのか分からないが、メリーは和樹をまた撫でた

「……えつこ正一」

「あら~もういいの？今しか味わえないメリーさんの膝枕よ？」

「こきなり悪いな、もう大丈夫だと思つ

「……そつ、じゃあ」

そう言ってメリーは携帯を和樹に見せる

画面には「クリスマス限定！ビッククリドッグキリワンダフルケーキ型ハンバーグ！！ いまなら三千円だ！お得ツウウ！」と書かれて見出しこれ有り得ない形をしたハンバーグの写真

そしてヨダレが少し垂れた満面の笑みのメリーが不気味なオーラで和樹を見ている、否

睨んでいる

「奢りね」

「…………ええ？この空氣でそういう言ひ方をされやう普通？」

「あら？麗しき女性の太ももを貸してあげたのよ？見あつた代償でしょ？」

ああそうだ、昔からメリーとは素晴らしい女性だったなど和樹は呆れたように溜め息をついた

人間関係つて必要だよね

メリーにとんでもないハンバーグを奢られたクルシミマスイブから一日後

俺は家でのんびりしている日々を過ごしております

「もう泣いていいよね…」

もう誰でもいいから雇ってくれないかな、なんて考えていると突然チャイムが鳴った

そう言えばメリーが来るみたいな」と言つてたな

「すいません！！新聞の勧誘なんですけど！！」

「うやうやまつたく違つよつだ…

「はいはい、ちょっと待つてください」

取り敢えず適当に断るかな

俺は玄関の前に立つと覗き穴からちょっと覗いてみた

「ついに文文。新聞現代デビューですよ……フヒヒ…」

なんかもの凄い美人が要るんだが関わっちゃいけない感がMAXなんだが

え？世の中にこんな美人がメリー以外にいたのか？取り敢えず

「ちょつ……ゲフンゲフン……御待たせしました」

「あやや…ダンディな声ですね、虫酸が走ります」

「え？」

「え？」

なんかいま初対面に対してもう待ない言葉が空耳したんだが、どうしたことなの？

「ああすこません！つい本音が出てしました」

直球すぎワロタ

「すいません、お帰りください」

「お邪魔しますね」

「え？耳腐ってる？大丈夫？医者紹介するよ？」

「あやや、狭い部屋ですね」

あれ？目の前に居たはずなのにいつの間にか炬燵に入つてミカン向
き始めたんだけど

あれ？確かにいま目の前に居たのに…

「何してるんですか、さつわと入つてくれないと契約の話がで
きないじゃねーですか」

「いや帰れよ、て言つか契約なんかしねーよ」

「いまならビッククリエイツ キリワンドフルケー キ型ハンバーグの割引券挙げちゃいますよ？お得ツウ！」

「いやだから帰れよ、なに？ワンダフルケー キ型ハンバーグ流行つてんの？どう見たつてあれ他店舗に差をつけるために開発した新商品だけど失敗しちゃってる形じゃねーか」

「さて契約の話ですけど」

「いやだから帰れよ」

「人の話は最後まで聞けって教わりませんでしたか？肩が」

初対面に対してもここまで言うとかもう美少女にはなんか性格が破滅してしまつ呪いでもかかっているんじゃないかな

取り敢えず炬燵に入つてみる

「あ、足は伸ばさないで下さいね、私が伸ばしますんで」

「喧嘩売つてゐ？」

「新聞売つてます」ドヤア

いや上手くねーよ、逆にイライラが増したわ
目の前の美人さんは思いつきり足をのばして俺の足を蹴つた

「もつちよこ向こうに行つてくださいよ、足当たつてます」

「分かった、喧嘩売つてゐるね、よし、表に出ひよ、血を見せてやる」

「あ、私は文と申します、名字は教えません、教えたくないんで」

「駄目だこいつ、卑くなんとかしないと……」

そういうと文は突然持っていた鞄から新聞らしき物を取りだし炬燵に無造作に投げつけた

「イシ契約せせる氣ねえだろ

「ぶんぶん…新聞」

「。の所は丸と読んでください」

「今まで聞いたことない新聞だな、知名度無いんだな……」

「え？ 文文。新聞知らないんですか？ エ……？」

「え？ いやいや、知らない…… よな？ 一般的に有名じやないだろ」

「ええ… マジで言つてるんですか？」

あれ？ 引かれてる？ エ？ この新聞つて一般常識なの？

……

「ああ、うん、思い出したわ、文。ね、うん、有名だよね、知ってる知ってる」

「ですね、ああジックリしました、まさか知らない人がいるんだ
あーなんて思っちゃいましたよ」

そう言つて文はホツとしたように笑う、「え? そんな有名な新聞なの?

いや、確かにここ一年くらいテレビ見てないし、最近有名になつた
んだ…

これは俺だけクラスの話についていけなくてそこで会得した・シッ
タカブリ・を使うときがきたな

「実はこの家が家の新聞を契約していないことを知りまして編集長で
ある私がここに来たんですよ」

編集長来ちゃつたよ!?

え!? 編集長来ちゃうくらい常識な新聞なの!?
就活において実は常識と言つのはかなり重要視されるのだ
ここまで有名な新聞ならその情報は確實だろ!

「あ、ああ、うん、そう言えば契約しようかなあなんて思つてたん
ですよね、はい」

「あやや、馬鹿ですね……」

「え?」

「いえいえーれわわーの契約書にわわーと書いてありますよー!」

「!」

文から渡された紙に目を通して見る

生年月日に性別に趣味に性癖に好みのタイプから

「これが今流行りの新聞なのか……？いや、なんか爺みたいなこと言つけど最近の流行りは分からねえ……」まあまあ取り敢えず書いとくかな

「性癖は足…ちょっと足伸ばすの辞めるんで伸ばしても良いですよ」

「へい……性癖書くのに意味はあるのか！？」

「とかこいつ用紙にビシシリ書いてますね」

「足、太ももの愛なら負けないんだ」

「…………」

「『』めん、やすがにそんな『』を見た田は傷付く

そんなこと言つてこの間に用紙に書き込みは終わり、用紙を文に渡した

文その用紙を鞄にしまい込むともう一枚の紙を出した

「来週から新聞を届けます、お楽しみにしてくださいね」

「ああ、うそ、有名だもんね、タノシミダナア（棒）」「

「では帰りますね」

あれ？今まで田の前に居たはずなのに聞こえてくるのは後ろから、つまり玄関から聞こえてくる

確かにいま目の前に居たはずなのに

「あるえー？」

ガチャッと言う音と共に玄関が閉まる音が聞こえてくる

「スタンダード攻撃？」

「いま思えばあれ騙されたんじゃね？」

冷静になつて見た、ちよつと友達に「俺つてさあ文文。新聞の契約してなかつたんだよね wwwwwwうえ wwwうえ ww」つて言ったんだよ

うん、普通に引かれた

「あのクソ記者めえ……」

「いや私に言われても困るんですが…と言つた普通は騙されません」

「早苗が反抗期だぞ諏訪子」

「私達には反抗しないからいいのぞ」

そして何を隠そが後輩であるこの早苗に引かれたのだ
同じ学校で注目を浴びていた俺【悪い意味で】と注目を同じく浴び
ていた早苗【いい意味で】は何故かメリ一繫がりで仲良くなつた
今では早苗の家である神社に泊まつたり飯食つたりと中々仲良くな
せて貰つてゐる

「相変わらずカズは馬鹿だな」

そしてのほんと笑ひこの口oriは早苗の従姉妹らしい諏訪子だ、身
体は小さいが早苗より年上とか

まあ可哀想に、需要はあるからいいんじゃないかな

「カズ？ その田は氣に入らないなあ」

「諏訪子、その小さな身体のどにゴリラみたいな握力がアアアア
アアアアアアアアアア！？すいません」「みんなさいもう考えませんから
離してエエエエエエエエエエエエエエエツ！？」

「諏訪子様、その辺にしないと部屋が汚れます」

「ああ、『めんよ早苗』

駄目だコイツら、人の心配とかそんなこと一切考えてねえ奴らだよ

「それで先輩はここに何しに来たんですか」

「おじおじ友達の家に来たら一つ、遊びにきたに決まつてんだろ。」

「k」

「就活はどうしたんですか就活は」

「ああ…来年から本気出す」

「大変だ早苗、一ートだよ、写真撮つていい?」

「しようがないですね、特別ですよ」

キラキラした瞳で諭訪子は早苗を見つめる
そして早苗は無表情で鼻血をスプラッシュしながらシャッターを一
回押した後諭訪子に渡した

なに然り氣無く諭訪子一枚納めてるんだこのロリコン…

駄目だこのロリコン…手遅れだ…

「一ートだ」パシヤ

「一ートですよ諭訪子様」パシヤ

「…………一ートジャナイモン…」

「始めてみるよ」パシヤ

「あまり見かけない顔ですかね」パシヤ

「……グスツ……」「トージャナイモン……」

「沢山いたら困るからね」パシヤ

「わつですね」パシヤ

「ヒツク……トージャ……グスツ……」

「カズが沢山いたら困るからね」パシヤ

「考えられませんね」パシヤ

「ウエハ……トージャナイモン……グスツ」

泣かないもん……トージャないから泣かないもん
写真に飽きたのか諭訪子はカメラをテーブルに置いてテレビを見始めた

「なんなの？新手の虐めなの？トートの何が悪いの？」

「いや、トートはもう悪いところしかないですよね」

「ですよね」

いや分かつてるとんだよ、だけど働けないこの辛さを分かつて欲しいね

「…………まあ先輩が路頭に迷うのも見ておけないです、家なら、

まあ……人手不足と言つが……」

取り敢えず寒いんだがこの神社にある炬燵は三角形の形なのだ、早苗と諏訪子とまあ一人寝しているので入れないのである。

「諏訪子、炬燵に入らせろよ」

「もう一人くらい働く人が欲しいなあなんで、その、まあ、給料は少ないですけど、まあ住み込みも」

「やだよ、テレビが見れないじゃないか」

「じゃあ膝に乗れよ」

諏訪子を無理矢理膝に乗せて炬燵に入り込む

「住み込みだからって、あれですよ？諏訪子様達の部屋に侵入なんか殺しますよ？ただ、まあ……我慢できないなら私の部屋に……」

「むう……簡単に女性を膝に乗せちゃ駄目だよカズ」

「安心しろ、簡単に乗せないから」

そう言つと諏訪子顔を赤くしながら納得がいかないよつにテレビを見始めた

しかし最近は寒すぎだらつ、ちょっと可笑しいんじやね

「地球の未来が不安だねえ」

「爺臭いね」

「あれですよ？決して私が先輩をとかそんなんじゃなくてですね、
諏訪子様達の心配であつて」

しかし暇だな、神社と言つても二七日とかなら暇なんだな…神奈子
は寝てるし、やる」ことがないな

「しかしどうするんだい？就職が決まらなかつたら一ート？」

「ですからね、1月の初めから住み込みなんですけど手続きとか…」

「まあ就職は最終手段はメリーアの使用人…」

「メリーアさんの使用人…………？」

なんか知らないけど早苗様がむつちゅ怒つとる…

俺は鋭敏じゃないんだ、マイシングトレーニングが難しいんだ（前書き）

12月24日、早苗の会話を修正しました

俺は鈍感じじゃないんだ、マイシのトレが難しいんだ

「んで、なんでメリーガここにいるのさ？」

「それは私が聞きたいわ、早苗に突然呼ばれたのよ」

神奈子がやつと田覚め、何故か分からんが早苗がメリーや突然呼び出し呼び出して置いて自分は俺を睨みながら飯を作り始めた

うん、改めて意味がわからない

「それで、さつきから諏訪子を膝に座らせているカズはなにか知ってるの？」

「いや、全く……あれ？ なんで一人して睨むの？」

何故か神奈子とメリーに呆れたように見られる
分からんが取り敢えず俺が悪いのか？

「カズは決して鈍感じじゃないわ、ただ馬鹿なのよ」

「そうだな、カズキは馬鹿だ」

「そうだね、馬鹿だね」

「え？ 何が？ 俺が悪いのか？ なんなの？ 友達の家に遊びに来たら馬鹿にしかされないんだけど……」

泣きかける俺を他所に三人は何故か疲れたように呆れたように溜

め息をついた

メリーなんかどうしようもない田を向けてくる

え? なんなの?

「まあこれなら簡単に奪われないって安心があるからいいんじゃないかな」

そんな事を呟きながら諏訪子は俺に頃垂れてきた
こう見ると本当に年上なのか疑わしいが体内である早苗が敬語を使
いぐらいなんだからそつなんだろうな

「まあ私にはどうでもいいけどね」

呟きながら神奈子は炬燵に潜り込んだ

そんな神奈子を見たメリーは一息ついた後同じく炬燵に潜り込んだ
こんな時出来る男なら料理でも作るんだろうが生憎料理など作れない
スクランブルエッグくらいこなら出来るぜ

「炬燵で暖まつてるとこ悪いですが、こ飯出来ましたよ」

ぬぐぬぐしている中、後ろの部屋から早苗の声が聞こえてくる
何時もなら三人でこの炬燵で飯を食べるのだろうが今は五人、後ろ
の部屋にあるテーブルじゃなきゃ食べられないのだ

「先輩、ちょっとどうしてください」

と早苗はお盆に一人文の「」飯を入れ運んできた

「ん? なんで一人?」

「私とメリーさんは此方で食べますので」

とせわつとメリーの場所と俺がいた場所に料理を並べてしまつた

「え? いや、みんなで向こう…」

「先輩」

「と思わない! ああ! なんか今は三人で食べたい気分だなあー! ?」

諏訪子と神奈子の手を掴んで後ろの部屋にヘッドスライディングッ!
そしてとある有名旅館の女将もビックリの音をならさずに扉を素早く
かつ丁寧に占める

「…この俺が恐怖を感じている…ツ! ? ……ばつ馬鹿なツ! ?」
の和樹が恐怖を感じているのかツ! ?」

「伝わりにくいネタはやめて早く食べないと覺めちゃうよ」

「今日の献立はビックリドッキリワンダフルケーキ型ハンバーグだ、
お得だな」

え? ワンダフル流行つてんの?

++++++

「それで何かしら?」

和樹達が騒いでいる部屋を後ろに一人の女性、いや生温い
二人の女豹がご飯を黙々とたべていた

「先輩が路頭に迷いつですよ？」

「? そうね、さすがに幼馴染みが一ートは困るわね

」

突然話を始める早苗にメリーは不思議そうに答える
そんなメリーに早苗は笑いながら言つた

「もし先輩が路頭に迷うなら先輩は家で雇うんで安心してください」

「ふうん…」

今! 一人の女豹は壮絶な心理戦を繰り広げています! 暫しお待ちく
ださい!!

「…………」

「…………」

凄い心理戦だ……ツ…踏み込む余裕がない…

「…………」

尺稼ぎじゃないですよ…」

「……ふうん、でもこんなの言つのもなんだけど給料低いんじゃない?あんな奴でも家なら雇えるわ、むりしなくていいのよ?」

語尾を強調しながら一コツとイイエガオでメリーは言へ、そんなメリーに対しても早苗はイイエガオで答えた

「……いえいえ!確かに給料と言つ事に置いては少ないですけど先輩一人ならなんとかなりますのでメリーさんは安心してください!」

つまり給料とか誤魔化せばなんとかなんだよーーいいから黙つて先輩をこいつに渡せ!!と言葉の後ろに隠れているのはメリーにとつて簡単に理解した

「…そうなの!でも和樹は早苗の所は選ぶかしら?あ、別に和樹が早苗を嫌つてるとかじゃないのよ?ただ……友達より幼馴染みにたよるんじゃないかなあつて思うの」

つまり貴様の好感度じゃ和樹はなびかねえんだよ、断れるんだから最初から誘わない方が幸せだぜ？」と言葉の後ろに隠れているのは早苗にとつて簡単に理解した

「ああそうですね、でも！諏訪子様や神奈子様と馴染みの友達と一緒に働くってのは働くことになりょっと法えてる先輩は楽な仕事場になりますよね？」

つまりこつちは一緒に働くのは先輩にとって中の良い友達しかいな仕事場になるんだぜ？仲良く楽しくを好む先輩はどう考えたつてこつちを選ぶに決まってんだろう

と言葉の後ろに隠れているのはメリーにとつて簡単に理解した

「ふうん…でもその辺は大丈夫よ、和樹を雇つたらまず間違いなく私の護衛みたいな役になるから、幼馴染みと一緒に仕事場になるのかしら、和樹は友達と幼馴染み、どちらに安心するかしら？」

つまりその辺は抜かりねえんだよ牛乳がツ！－いいからさつひと諦めろよタコが

と言葉の後ろに隠れているのは早苗にとつて簡単に理解した

「へえ、じゃあ殆ど同じ条件なんですね」

「そうね、全く…私達に迷惑をかけているのをカズは理解してるのでかしらね」

「そうですね、先輩つたら仕方のない男ですか？」

「そうね、全く同感だわ」

そう良いながら一人は笑い合つ

決して仲が悪い二人ではないのだ

ただ女性の勝負に友情など無縁なのだ

「クリスマスだってのに先輩は独り身ですし、可哀想ですね」

「そうね、と言うかむしろあの男に惚れる女性が居るわけないわよ

「それもそうですね」

惚れている一人の女性は笑い合つ
底知れぬオーラを放ちながら

+++++

「酷くない……俺だつて頑張つてんだよ……俺だつてさあ……」

「ああ～……うん、カズ、来年は良いことあるよ」

勿論隣の部屋は襖一枚じや声など遮れずに会話は全て和樹の耳に入
つていた

物語は急速として訳の分からぬ展開になる

日が落ち始め、赤色の夕暮れに照される自分の部屋をなにも考えず
に見ていた

お世辞にも広いとは言えない部屋にテーブルが一つ、そして俺の向
かいには幻想的な美しさを放つ幼馴染みに良く似た女性

しかし似ているのは外見だけで

「 貴方の選択肢は二つ」

目の前の女性の声は透き通るよつに もして脳に叩きつかるよつに
よく聞こえてくる

その声もそつくりで、俺に語りかけてくる

「見捨てるか…見捨てないか」

まるで意味を感じさせない微笑みで俺を見つめて問い合わせてくる

それだけで、似ていると云うだけで、無意味に頷いてしまいそうな
自分を止められなかつた

答えなんか出せなかつたんだ　俺は彼女を救いたい

なんでこんな状況になつてゐるか、少し落ち着くために思い出してみ
よつか

あれは何日間か前だ、ある女性から突然来た電話から始まつた

++++++

『久しぶりね～元気にしてる?』

「なんですか、今夜中の一時ですよ?金は貸せないですからね?」

『……あんたが私を見ている田がどんなものか分かつたわ』

少し怒氣を含ませた声にハハツと笑い返す

それもそうだらう、この人の電話は毎回毎回良い思い出がないのだから断ります

「なんですか蓮子さん?無人島にフレッシュショウマークでも探しに行くのなら断ります」

「じゃあ雪男?」

『……まず藤岡○探検隊から離れなさい、今回は違つわよ』

「ああ、じゃあ失われたアトランティスとかですか」

『ぶつ飛ばすわよ』

「すいません[冗談です]

トーンが低い声に隙いれず謝る、この人は怒るとメリー並みに怖いのだ…

電話の相手は宇佐美蓮子始めて会つた時に「軽いロクネーム…?」

と眩いでビール瓶で殴られた

どこのマフィア映画だと、思わず突っ込む前に頭から血がスプレー
シューして意識が消えた

あの時は酔つっていたとかほざいたがどんな悪酔いだと数時間は説教
したい

『ちょっと今から会いたいんだけど会えるかしら?..』

「はー?蓮子さん今は東京じゃ?..」

『今は京都駅よ、ちょっと急用なの』

「はあ…?あれ?でも来年まで帰つていなって書いてませんでし
た?..」

そう言えば後ろからガヤガヤと聞こえてくる、今駅にいるのか
え?今夜中の一時に駅にいるのか?そんな急用?

『のんびりと休養する暇もなく急用が入ったのよ』

「寒…………」

『駄洒落じゃないわよ!..』

休養してる時に急用、うん、上手くないね、そんな事を話している
合間にホームで聞こえる高い音は聞こえなくなつた、外にでたのか
?やけに急いでるな

『ああやつぱりバスないわね』

「タクシーならあるんじゃないですか？」

『お金がないわ』

「貸さないですよ」

『安心しなさい、一コードに詰つるほど落したりしないわ』

ああ、教えたのはまず間違いなくメリーしかいない、教えちゃ駄目な人に真っ先に教えやがって

「わよなり」

『和樹』

なんだ？なんか異様に焦つているのが手に取るよつて分かる、掴みにくい蓮子さんにしたらかなり珍しい雰囲気にしきりも無意識に構えてしまつ

「…そのまま急ぐんですか？」

『わうね、こんな無駄話してる暇が無いくらいいい』

これは、ふざけてる場合じやない雰囲気だな

俺は立ち上がりバイクの鍵を取り長ら寝間着だつた服を脱ぎ捨てる

「一時間くらいで行きます」

『ありがとう…急いで欲しいけど事故らないでね』

「分かつてます、切りますよ」

相手の返事も聞かず携帯を置む、ダウンを着込み部屋の戸締まりを確認せずに飛び出る

「たく…」

絶対にただ事じゃない、蓮子さんが彼処までなつてているのはメリーならいざ知れず、高校からの付き合いである俺は見たことがないあの人からかかつてくる電話はいつも平和じゃないんだ…嫌になつてくる、たまには愛でも囁いて貰つてもバチは当たらないよな?

「雪降つとるし……そつこやメリーが今日は降るつて言つてたな」

急いで玄関を閉めて階段をかけおりる

今更ながら1~2階なのにエレベーターがないとは製作者は馬鹿なのではないのか

一階に降りた先に駐車場に置いてあるバイクに向かう、シートを取り上げるとそこに現れたのは無骨な黒のデザインにカスタマイズされた車体

エンジンは特注品と言つ有り得ないくらい金がかかつた中型バイク

、まあ、これはメリー繫がりで破格の値段で…

「んなこと思つてゐ場合じやねえな」

シートを丸めて端に投げると鍵を差し込みエンジンをかけた

夜中には迷惑なエンジン音が響く

近所の“就寝中”の皆様…！“就活中”的私目が迷惑をかけて申し訳ありません…（ゝ・・・）テヘペロ

「…………いや…………伝わりにこくに上に馴熟落になつてないな…………」

アホやつでないでわざと行こう

アクセルを握った瞬間にまた携帯がなり始める
今から行こうと言つのに…

一回エンジンを切つたあと携帯を開くと蓮子さんと画面に表示された

「なん…」

『ひょわああああああああああああああああああ…』

一瞬だけあまりの声量に携帯を耳から離し思わず携帯を落としそうになり慌てて強く握り直す

『か、和樹！？一時間と言わば今すぐ来てええ！？』

「れ、蓮子さん！？びびったんですかー！」

今まで聞いたことがない悲鳴に急いで聞き返す

『大ピンチ！？追いかれたのよ！？私に戦う能力はないのよ…』

「ちよつー蓮子さん！？落ち着いてッ……今ビードル…」

『ひやあー？ちよつー？放しなれこよッ…』

突然ドサッと音が聞こえてくる、そして携帯からは何かを落とした
よつの大きめの音が聞こえてくる

『携帯落とした…集合場所は、一人の思い出、よー』

遠くから携帯越しに蓮子さんの声が聞こえる、そのあと何人かの足
音が聞こえてきた後、携帯からは無音しか聞こえてこない

ヤバい、これは何か知らんがかなりヤバいぞ

「蓮子さんーおーー？蓮子さんー？だあッ…もうッ…なんであ
の人はいつも…」

急いでエンジンをかけてアクセルを思いつきり捻る、この際信号とか
スピードとか守ってる余裕は無い

「前科とか絶対就活に響くじゃねえか…くだらない理由だつたら怒
鳴つてやるからなアッ…」

無事でいてくださいよッ……

「なんのよチャイナコスプレ変態女つー？』

+++++

「なつ！？なあツー？この服装は中国でれつきとした私服です！」

「何時の時代よツー？日本語ペラペラな癖に中国氣取り！？誤魔化し下手くそすぎでしょ！！」

人気の無い夜の道、大通りだと言づのに全く持つて人一人いない、不気味な雰囲氣を放つていて

そしてその道を三人の女性が走つていた

一人は特徴的な帽子を被つて肩ぐらいまでのショートヘアの綺麗な女性　宇佐美蓮子がリュックを背負いながら走つていた

そしてその蓮子を追いかけるようにメイド服を着た女性とチャイナドレスを着た女性が追いかけるように走つていた

「美鈴！もう少し速く走りなさい」

「無理言わないでくださいよ！？現代ってなんか上手く走れないんですね！妖力も使えないですし！なんなんですか現代って！」

蓮子は思う、なんだあの見るからに危ない関わりたくない二人は現在進行形で私を追いかけている
この構図を知り合いに見られたら最悪だ

「なんか無用にあの女性速くないですか！？明らかに運動不足丸分かりの女性なはずなのに！」

「五月蠅いわね！？運動不足じやなくて運動しないだけなのよ！？」

「太った女性が何時でも瘦せられるみたいな言い方ですね」

「五月蠅いわね！？追いかけて嫌味言わないでくれるー！」

「太ったに反応しましたよ、あれ気にしますね」

「確かにちょっと気持ちふくらしてるわね」

このまま止まってぶん殴つてやろうかと蓮子は思つ、ただあの二人は見た目に反して有り得ないくらい強いのだ
自分を助けるために駅に居た警察四人を十秒とかからず氣絶させた、
あれで本調子ではないと言つのは会話から分かる

つまり自分が行つたらまず間違いなく捕まるのだ

「ハアツ……き、キツイ……」

こんな事なら普段から運動をしどけば良かつたかなんて思つ、我がサークルの運動は和樹がいつもやっていたのだ

「疲れが出てるわ、あと少しよ」

確かに厳しくなってきた、息も厳しくなって足もプルプルしてきた、残念ながら私の足は細くて美しくて綺麗過ぎるかわりに筋肉などないのだ
プルプルつの可愛い足なのだ

「あ、キツイ！…あ、あの馬鹿はまだなのー？…」

「あの馬鹿？」

「や、ヤバい！我ながら…馬鹿言つたあ！」

メイド服の女性が感づいたらしく、それはそつか
我ながら何回も和樹の事を言つてしまつた

いやだつてさ、私だつて女の子だし、男の子に助けを求めたつて
いいじゃない？いいわよね？

「美鈴、多分彼女は助けを呼んだみたいだわ」

「さつきの独り言ですか？ そう言つ�能力ですかね？」

「それは分からぬけど、彼女の独り言は私達が男達を倒した後ね
……つまつ」

ヤバい、なんか全部が全部バレちゃつた？いやまあ隠してた所で
んま意味はないだろうけど

「でも大丈夫そうですよ、彼女はもう走れなくなります」

「な、なんなのあの体力馬鹿達！？…………きつつい…ハアツ…」

初めは数百メートル放れていた距離が段々と近くなつて来ている、
しかも高速道路なのに車が一切走つてないと言つ異常な光景
どこの魔術ですか？

しかも追いかけてきている一人のペースは全く変わらない
どこの幕の内ですか？

「は、走れない……ッ……きつつい！」

もう後ろを向く余裕なんか無い、と言いつかすぐ後ろに来て手を伸ばしている

「……………」

触れた、どちらかの手が帽子に触れた

「かず...ハアツ...和樹つ...」

そして次の瞬間、肩を捕まれた

「なあ！？い、いやア！」

そしてチャイナ娘に羽交い縛めにされた
捕まつた、完璧に捕まつてしまつた

「ふん！」

「いやー？ちよつと痛いです！ーーーっ！」

「ちゅうっ ハアッ 微動だにしないって 女性としてどうなの？」

「少し静かにして貰いますよ」

そう言いながらメイド服の女性は突然どこからともなくナイフを取

り出した

「へえー? やつは嘘でしょ…?」

「安心してください」

「い、いや…」

ゆうぐりと少しづつこちらを歩いてくるメイド女はナイフを手でクルクル回しながら弄ぶ

「か…和樹…」

「あ、あはは……」これ完璧に私達悪者ですね

後ろの女は笑う、今の私にはそれも怖くて、なんか周りの暗闇も怖くて、上手く考えられない

「和樹… 和樹！」

いつもこんな怖い時はあの馬鹿が近くでへらへら笑ってる癖に、今は居ない

自然と私は和樹の名を讀んでいた

「Hの馬鹿……いつも居なくて良い時に居るくせに…」

さつき助けを呼んだのが和樹だからなのか

私が無意識に和樹に助けて貰いたいのかよく分からぬけど

「今私は凄く怖いのよ…速く、速く来なきよクソーネート…」

メイド女がナイフを構えた時とつに刃をつぶしてしまった、ああ
なんな、最後にもしかして凄く恥ずかしいこと叫んじゃったわね、
なんて思つた

「…あ、あれ？」

刺されるつて案外痛くないのかと疑問に思いながら刃を開けると、
メイド女の後ろ姿が目に写つた、よく見れば私を拘束しているチャ
イナ娘もこちらではなく前を睨んでいた

私は釣られるよひに前を見た

「あなたが援軍かしら？」

「ああ、援軍だな」

そこには無造作に転がったバイクと今まで見たことの無いような表
情を浮かべた友達がフルフェイスを取りながら立つていた

「そのナイフで何するつもりだったんだ？」

フルフェイスを地面に投げつけてうつ向いていた顔をあげた

「か、和……樹？」

その表情は、見て分かつた

あれは完璧にぶちギレてる和樹だ……

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6880z/>

東方想譲心

2011年12月25日23時45分発行